

……僕の小さかった頃、それは……
それは、何もかもが初めて見るものばかりで、訳もなく嬉しくて楽しくて幸せな輝きの中にいる日々だった。

雪の降った翌日は、見るものすべてが真っ白な世界だった。

車に乗って皆で出かけた。誰かの膝の上に乗せられ、車内も賑やかだった。

車から降りると、新雪が広がる草原のような処だった。背後には森が続いている。

その雪原で、子供たちはプラスチックで出来たディスクを投げ、子犬だった自分は嬉々としてそのディスクを追って走りまわり銜えては、また走り戻って人に渡した。

教えられなくとも、自然と飛んでいるものを見ると走って追い、飛び上がっては空中でキャッチした。

うまくいくのが嬉しかった。そしてまたそれを人に渡すと、人はそれを受け取り、自分を褒めてくれた。褒められるのはもっと嬉しかった。

子犬だった自分は、何もかもが嬉しくて、子供たちと雪の中を駆け回り、子供達も雪まみれになって遊んだ。

雪原は、陽の光に照らされて眩しく輝き、時々、木々の枝から粉雪が、はらはらと散った。

毎日が夢のように楽しかった。

やがて、冬が過ぎ、雪どけとなった。

毎朝、子供たちと散歩に出かけた。散歩が終わると、子犬はケージに入れられ、子供達は鞆を背負って出かけて行った。

……木々の固い芽が強い南風に吹かれてザワザワと揺れ、春の気配が表れてきた頃、飼い主の家族は、あまり遊んでくれなくなった。

散歩に行くことも少なくなり、手入れもあまりされず、毛が絡んで、あちこちに毛玉ができた。

そしてまた、いつも居るケージがだんだん狭くなった。掃除もされなくなってケージの中が臭くなり、居心地が悪くなった。

…ある日、家族たちが言い争いをしていた。

花瓶が落ちて砕け、水が流れた。本やものが宙を飛び、その中の雑誌が犬の顔に当たった。思わず、彼はキャンと声を上げた。

彼は、皆の喧嘩を止めさせようと必死になって呼びかけた。

「みんな、やめてやめて！…みんなあ！喧嘩しないで！…」
と、その時、駆け寄った飼い主が手を伸ばした。

撫でてもらえるのかと思った次の瞬間、思いつきり鼻先に一撃をくらった。

思いがけず顔を叩かれて、彼は驚いてすくんでしまった。

他の誰かがかばって、またそこで言い争いになった。怒号が響き、椅子が倒れた…。

…そしてあの日、いつものようにドライブに行くような支度で車に乗せられた。

そこから先のことは、今の時間と繋がっている。

若犬は、溜息をついた。

いつしか激しく降っていた雨が上がり、雲の合間から陽が射し始めた。空を見ていたゴンが口を開いた。

「雨が上がると…空に虹ってやつが出てくるって聞いたことがある…」

「虹って？…」

「なんでも空に浮かんで出る何か橋みたいなもんらしい…聞いた

ことあるか？」

「 ううん……で、おじさん見たの？」

「 いやあ、俺あ見たことがねえ……ただ、それを見てる人間を見たことはある。……人間は、雨が上がると空を見上げる……そんでもって空あ見上げて、どっかを指さして幸せそうに笑うんだな……」

「 ふうーん 」

「 俺あ、そんな幸せそうに空を眺める人間を何度か見たことがある……虹、つて言ってた……虹が出た……つてな……」

「 虹……僕も見てみたい……」

「 ああ、俺もだ……」

「 どうやったら見えるの？」

「 ……さあな……。俺たち犬には見えねえのかもしれないねえが……見えたら幸せになれそうな気がするぜ……」

……その虹というものを見てみたい……

ゴンの話に、若犬は本当にそう思った。

ゴンが立ち上がった。

若犬もそれに従って立ちあがり、二匹は再び歩き出した。

雨上がりの空気は辺りを潤し、景色が輝いて見えた。

若犬にとって、辺りの気配、そして見るものすべてが、とても自由で美しく素敵に見えた。

二匹の頭上には、大きな虹が架かっていた。

つづく